

目次

I 小説家の四季

二〇〇七年	3
秋——冷蔵庫理論	
二〇〇八年	10
冬——ほくろ理論／春——ワープロ／夏——パソコン／秋——ボル	
二〇〇九年	37
冬——ボル2／春——未知との遭遇／夏——ボル3／秋——ホワイトボード	
二〇一〇年	64
冬——透明感のある文章とは？／春——椅子／夏——老眼鏡／秋——幸運について	
二〇一一年	91
冬——二十年後のスパゲティ／春——黒髪／夏——黒髪2／秋——副産物	

二〇一二年 118

冬——節電／春——ならば／夏——頭書／秋——皿の謎

二〇一三年 145

冬——喪服／春——貰い水／夏——手紙／秋——手紙2

二〇一四年 174

冬——お休み／春——文豪病／夏——さんづけの時代／秋——作家さん

二〇一五年 196

冬——背文字の人／春——サイン会観／夏——理想型

II 作家の口福

僕的一天 221

作家の口福 223

目覚まし 230

結婚と書いてゴミ袋まであさると読む。 232

219

III 文芸的読書

文芸的読書	237
いんぎんといんげん	242
私事——野呂邦暢『愛についてのデッサン——佐古啓介の旅』	247
現実——盛田隆二『夜の果てまで』	254
本気——伊坂幸太郎『残り全部パケーション』	263
きのう読んだ文庫——吉田修一『横道世之介』	270
二戦二敗	272
忍者	275
夢へのいざない	277
道のり	279
あとがき——いつものように	281
初出一覧	286



I

小説家の四季

二〇〇七年

秋——冷蔵庫理論

今年の夏はかくべつ暑くしかも長く続いた。

とタイトルに沿って季節の話題からさつそく始めて、予定している冷やしソーメンと文章の推敲時における「冷蔵庫理論」の話に移り、あとは、こういうノリについて来れる人だけついて来ればいいみたいな書き方もあるかとは思うのだが、なにしろ新しい連載のこれが第一回目だし、なんの前置きもなしに進めるのは読者に不親切な気もするので、「はじめに」というか「これまでのあらすじ」というかまあそんなものを一応補足しておいたほうが無難というものかもしれない。

「はじめに」というのは、今回本誌ではじめて佐藤正午の名前を目にしたかもしれない読者に対する親切で、断るまでもなく僕は小説家であり長崎県佐世保市に住んでいて今年五十二歳になる。

「これまでのあらすじ」というのは、佐藤正午の本をこれまで何冊か読んだことのある読者ならこの通しタイトルを見て、ああまた例のごとく呑気に始まったな、相も変わらずの随筆だな、と高をくくられるかもしれないので、それが実はそうではない、ここに来るまでの一年のあいだ、呑気に見え

る小説家にもちよつとした苦勞があつたといふことの補足説明である。

ではそこからいきます。

二〇〇六年の秋に体調をくずして、今年の春まで約七カ月のあいだ小説書きの仕事を休んだ。具体的にいうと連載中だった長編小説をふたつ（書き出したばかりのものと、じき書き上がる予定だったもの）、ふたつとも放り出して、そのまま見向きもしなかつた。

体調をくずして、というのは曖昧で便利な表現だが、実際のところ身体のほうは病院へ通つて胃力メラを飲まされたり薬を処方されたりといった程度の変調で、別に大病をわずらつたわけではなく（幸いなことに）手術も長い入院生活も必要ではなかつた。じゃあなぜ七カ月も仕事ができなかつたかという（たぶん）身体の変調が（もともと気が弱いたちなので）気持まで支配していたからである。いゝ年してこんなこと書くのも恥ずかしいけれど、去年のいまごろは自分の人生が地味でつまらなく思えて仕方がなかつた。

それはまあ冷静に過去を振り返れば、僕の人生は地味でつまらないといえれば子供の頃からえんえん地味でつまらなかつたし、そんなことには慣れていて小説を書くことの邪魔になつたためしはなかつたのだが、去年の秋には小説を書くどころか小説を読むことからまずつまらなく思えて、それで最後の砦を攻め落とされたような気分になつて落ち込み、と同時に冷静さを欠いてうろたえてしまった。

連載小説なんか書いている場合ではない。でもかといつてほかになにをする気力もわかない。なににも手につかない。体調不良のせいで食欲もない。食欲もないのに日に三度（根がきまじめなたちなので）食後服用の薬も飲まなければ気がすまず、無理やりにでも食べ物を口に入れなければならぬ。毎日

がつまらない、人生がこれじゃつまらない、ということが、あとちょっとでも気を緩めると、もう生きていくのがつらいという暗い眩きに変わりそうで心細かった。

でもこの話はこれ以上続けると健康な人の病氣自慢、または年寄りの昔自慢みたいな話になる。なと思う。一年経ったいまも、人生が地味なのはおなじだが、生きているのがつらいという最終結論にも至らず無事に暮らしているわけだから、当時の心細さについてどう書こうと結局は、たとえばの話、呑気な小説家の「自分もいまは落ち着いてるけど、昔はワルでさんざん女を泣かせて」みたいな懐旧談と同様に読まれる危険がある。だからここはひとつだけ、当時のその心細さにまつわるエピソードを書いて先へ進もうと思う。

先日、担当の編集者が仕事の打ち合わせに佐世保まで来てくれて、仕事の話はものの三十分で終わり、そのあと酒を飲んだ。会話も途切れがちになったので、焼酎の水割りをちびちび飲みながら僕はふと思いついて、去年の秋に未発表の小説をひとつ処分したという話を披露した。未発表といえればこえはいけれど、いまから三十年ほど前、ある雑誌の新人文学賞に応募してそれっきりになった小説のことで、要は雑誌の編集部には相手にもされなかったレベルの若書きの作品である。むかし応募するときにコピーを取っておいたのだが、その原稿用紙約百枚ぶんのコピーを昨年の暮れ、大掃除のときに思いきってゴミ袋に詰めて捨てた。

するとそこまでの話を聞いた編集者が、

「もったいないなあ」

と声をあげた。僕と違って焼酎のロックをぐいぐい飲んでいたので多少酔ってもいたのだと思う。

「なんてことするんですか。正午さんがはじめて書いた小説でしょう？　なんでその原稿捨てちゃうかなあ」

「原稿じゃなくてコピーなんだけどね。送った生原稿は返却してもらえなかったから」

「どっちにしてもですよ。捨てるくらいなら、じゃあなんで取っておいたんですか、三十年も。なにもゴミと一緒に捨てることはないでしょう。もったいない。それに手を入れて一冊本ができたかもしれないのに」

そう言われてみて、僕はふたつのことを思った。

ひとつ、三十年も大事に取っておいた原稿のコピーをいまさら処分したのには、やはりそれなりの動機があったはずで、処分したときには早めの「身辺整理」をしているつもりがあったのかもしれない。自分が死んだあとでこんなお粗末な小説を人に読まれるのは御免だから、手遅れにならないうちに。つまり、いまはもう回復して忘れかけているけれど、当時は自分の死とか死後のこととかをそう遠くない未来、もつといえれば目前に迫っていると考えるくらい、心身ともにそのくらいの病気の状態にはあったのに違いない。

もうひとつ、でも三十年ものあいだ（コピー用紙の文字が薄れるくらいまで）それを取っておいたのは、たとえ下手くそな小説でもやはり自分の書いたものに愛着があったからで、いま編集者にお世辞でももつたいたいと言われれば、それはその通りだ、実にもつたいたいまねをしたと自分でも思ってしまう。うまく手を入れて一冊本ができたかもしれないのに。だが、いまそう思えるということは、すでに自分が「身辺整理」を思いつく以前の自分に戻っているという意味で、病気の状態から脱して

いることの明らかな証明にもなる。やはりあのとき処分しておいて正解だったのかもしれない。処分しておいたおかげで、もつたないまねをしたという後悔がめげえ、いまは自分がもう病気ではないことを自覚できるわけだから。

—ということは、要するに三十年前に書いた若書きの小説をひとつ犠牲にして、僕は一年生き延びたという実感を得ることができただけだ。これはむかし自分で書いた小説にいまの自分が窮地から救出された、と言つて言えないこともないだろう。少なくともそう都合よく考えてみるくらいはできる。で、こうやってまた、呑気な随筆を書き始められるわけである。

さて。

今年の夏はかくべつ暑くしかも長く続いた。

どのくらい長く続いたかというところ、気象庁はなんと言うかわからないが、僕の個人的な意見ではそれは十月五日まで続いた。

ここから冷やしソーメンの話になる。毎年、夏のあいだは昼食にソーメンを茹でて食べるのが日課で、その日課がいつ始まっていつ終わるかが、季節の（春から夏へ、夏から秋への）移り変わりの目安になっている。ちなみに部屋着が短パンかジーパンか、Tシャツ一枚かその上に長袖のシャツをはおるかというのもソーメンとおなじく目安になる。

で、気まぐれに付けているメモによると、僕は今年十月五日の午後、短パンにTシャツ姿で台所に立ち、ソーメンを茹でて水道水で洗ってぬめりを取り、氷水にうかべて市販のダシにひたして食べた。

ゆえに今年の夏は確実にその日まで続いていたわけである。そしてその日以降、ソーメンを食べた記憶がないから、それが夏の終わりを示しているのは間違いない。一方、夏の始まりはどうかというと、気まぐれなメモなので今年の夏最初のソーメンを食べた日付が抜けていて、残念ながらこの日と特定はできない。特定はできないが、仮に七月上旬にソーメンを食べ始めたとしても、今年の夏はなんとまるまる三カ月も続いたことになる。例年になく長く続いた暑い夏として記憶されるべきだろう。

それでその長く続いた夏に僕がなにをしていたかといえは、とうぜん小説を書いていた。昨年秋に放り出して見向きもしなかった長編小説の(じき書き上がる予定だったほうの)続きを書き、なんとか八月に脱稿し、九月には校正刷こうせいずりが出た。小説の読み直しの作業である。今年の九月はまだ真夏で、近所の蟬も盛んに鳴いていた。

ここから文章の推敲時における「冷蔵庫理論」の話になる。紙幅が少なくなってきたので先を急ぐ。蟬の声を聞きながら校正刷を読み、昼食に冷やしソーメンを食べ、午後また読み続けるという日課のなかである日気づいたのだが、自分の書いた小説を何度も何度も丁寧に繰り返し読んでみると、書いたときには不注意で見えなかったもの(誤字や脱字のたぐい、いまになって不適切と思える表現など)が見えてくる、というのはあたりまえだが、それとは反対に、もしくは同時に、見えなくなるものがある。見えなくなってしまう場合がある。なぜかというところ、おそらくおなじ箇所を繰り返し読んでいるうちに、見慣れてしまうからである。

この問題をうまく説明するために、たとえば使い慣れた日用品の細かいデザインに誰が注意深く目を向けるだろうか? とか、長年連れ添った夫(妻の)一言ひとことに誰がいまさら耳を傾けるだろ

うか？といった比喩も思いついたのだが、それよりも、冷蔵庫の中身の話を持ち出したほうが早いかもされない。毎日、朝から晩まで何回も何回も開け閉めする冷蔵庫。すっかり見慣れていて、中になが入っているかは把握できていると安心しきっている自分の冷蔵庫。だがその棚の片隅に賞味期限切れの食品が眠っていることもある。それを自分では発見できず、たまたま遊びに来た遠慮のない友人に指摘されることもある。なにこれ？ 賞味期限は去年になつてよ。

毎日開け閉めして中を覗いているのに気づかない。目はそれを見ているはずなのに見逃している。ないと思っていた食品が実はそこにある。おなじように、自分で書いた(はずの)文章を読めば読むほど、見れば見るほど、言葉の姿が見えにくくなる、という事態が発生する。これがいわゆる「冷蔵庫理論」である。だがこれは書かれた文章の具体例をあげないといまいち伝わりにくいだろう。いまはその余裕がない。次回はこの話題からさっそく入る。